

透視
容易
千里眼

日本心理學會叢刊

◎ 目 次

物理学上推新不能に屬する千里眼……………一

麻 覺 と 千 里 眼……………三

人類通有性なる心靈の發揮……………四

神通力天眼通とは即ち心靈の發揮……………六

千里眼透覺術の修養……………一〇

意 志 の 修 養……………一〇

感 情 上 の 修 養……………一〇

身 体 上 の 修 養……………一一

吉凶禍福前知法……………一一

透覺千里眼

一 物理學上推斷不能に屬する千里眼

米國神學博士 ゼームス アリストン 閣
日本心理學會 三宅隆海 著

明治 44. 1. 10 内交

千里眼なる三文字は、物理學上の大問題として理、哲、文、醫、あらゆる諸學科に於る碩學博識の諸博士の
手記に於て、研究の中心を以て、今猶明晰なる頭腦を以てす。完全に其理を解決し能はざる。一種
妙、幽玄の心的作用に於ける或る程度に限られた一の透覺術にして、熊本縣の人。御船千鶴子女史に因て
始めて公にせられた名稱であるかの如く誤認せる者あるも。古來我國は固より、東洋諸州歐米各國に於て
十八世紀時代より行はれた不可解の心的作用にて千里眼なる透覺術の。術者千鶴子女史二次で今又長尾
子女史等何れも、或る動機から常人の成し能はざる透覺力を得て。屢々人を驚かし神の如くに偉大の尊敬
を拂はれ、學者の頭腦を痛ましつゝある誠に稀有の婦人には違ひないが、吾輩をして忌憚なく言はしめた
なら、決して不思議でもなければ驚愕と尊敬をする程の價值はない。吾輩は何人にも透覺術應用の資格あ
る者にして、練習研究をすれば、容易に成し能ふからである。斯く公言はするもの、決して両女史を、輕

侮するの意志は微塵も著者は持つて居らぬのみか、能く今日の程度まで、練磨研究したかを賞讃するに吝ならざる一人である。今日まで實驗した女史の心的作用が完全に成功したとは認識はしない。女史にして今日の意志を継承し、堅忍練習をなさば、一世を驚倒せしむる底の技術を獲得するであらふ事は信じて疑はない福來今村兩博士の紹介と斡旋に基き御船千鶴子女史東上し、其第一回の試験を大橋邸に行ふに當り兩博士より各學科の諸博士に臨場實驗を求められた際、一人に山川理學博士は下の如き意見を吐れた。

我友福來君の紹介する御船千鶴子が實行すると云ふ、透視力が自ら聲明する如く紹介者の證言する如く、果して正確に的中するとせば、世界の科學界の新記録にして、透視にも非ず心理感應にもあらず千鶴子婦人獨特のものにて、何等の名稱をも付し難き一大事實となる可きを以て、世界の心理學界に進んで發表すべきなれど、我國學者は、假りに實驗上疑ふ可き餘地なしとするも、歐米の學者は俄に贊同するであらふか、懸念するのは現に斯云ふ事がある、伊太利のトンノ大學員外教授で、犯罪心理學の大家、故ロンブローニ博士すら、ユーサー・チャンバラチノ嬢に散々に愚弄せられ、人は死すとも靈魂は死せずと誤られ、博士は彼嬢の種々なる、死靈活動の實驗を目撃し、一世の碩學も、之を妄信して終に逝しが、博士逝去して時を経ざる本年の春、手品師のバラチノなる者、又々大學者連中を欺いた、其バラチノの方法は、暗夜薄闇の一室の机に對し、傍に兩手兩足を摩しつゝある監視人を置きしに、彼は身動きもせざるに眼前の机上下左右に動搖し始め、机の舞を演せしが、此際

背後に一寫眞師がマグネシウムを點火して寫眞を取りしが、驚くべし此寫眞には、彼女が二本の手足を以て自由自在に機械を操縦せるを明瞭に映寫せしを以て、遂に彼の手品は發覺し、碩學ロンブローニ博士を欺きし學界の新聞實存する際なれば、歐米の學者は容易に信用せざるのみならず、輕々に發表して失敗を招きては、我學界の威信にも關する重大事件なれば、余は千鶴子を欺はずとして最も完全なる手段器具にて透視す可き確證を得たいので、若し之を得たときは、我學界の誇として世界に發表するも、秋毫の躊躇を要せず、故に充分なる實驗を行ふ精神である。

如上は山川博士が、人に公言した處で、女史の千里眼を疑ふて居られたは明白に判ると共に、女史をしてバラチノ、並に擬して居るのでない事も亦た判つて居る。要するに、博士の碩學博識を以てするも、到底物理學上の推斷は不可能である事が、證されて餘りある、然り物理學、醫學上、今日の程度に於ては、其蘊奥を究めんと雖、恐らく其理を究め難きは千里眼である。

二 禪學と千里眼

凡そ此世の中に於ける總ての事物は、深く其理を探ぐり究めて、明白ならざる道理はない等、否斷して推處ではない、絶對的にないだ。然るに一婦人千鶴子女史の、透視力即ち千里眼のみ、推斷不可能たる可き理由あらんや。吾輩をして言はじれば不可能ではない、推理研究の未だなのである、試みに思へ、

獨り千里眼のみ殊更ら仰々しく不可思議なるこそ、不可思議なり。彼の禪學の蘊蓄者に就て查せば、隨分千里眼透覺術以上常人をして驚倒せしむる事を敢て行ふて居るではないか。

精神修養に最も完全の偉功を奏するは、禪の悟道を究むるにありとは、何人と雖恐らく異存のない處なる可きも、其精神修養全く成り、禪の奧に入りたる人は、日本版しといへども幾人かある、實に指を屈して算する程の少數たるや論を俟さるべく、其少數の偉人が行ふ事實に對しては、俄に今日の科學的に當てはめ推斷を下さば、是れ又不可能に屬すれど、近時禪學より出たる事物に對しては、稍具體的科學上の説明をする人もあるやうだが多くは單に心的作用の名稱を下すに止まるのである。然らば千鶴子、長尾の透覺力千里眼も、亦た當分の間は心的作用の名稱を付し置より他はあるまいが、近き將來には必ず具體的科學の説明を公にする事が出来る事を公言して憚らない。

三 人類通有性たる心靈の發揮

千里眼透覺は、所謂心的作用であれば、凡そ心靈の存在する動物であれば、必らず出来るのである、修養練磨せば無論容易の業に屬するも、何人と雖如何せば自己の心靈をして、五官以外斯る働きに耐へしむるのであるか、何を以てか練磨の目標とす可きか不明であるが故に、修養練磨が出来ないのである。

心靈の修養練磨は、言ふまでもなく一朝一夕に成功するものでない、又人に依りては絕對的不成功に終

る者もあるが、十に對する六までは必ず成功すると斷言して憚らざるは、人類の通有性にして、從來の實験に照して明かであるからだ。

其人類通有性たる、心靈作用の發揮を遺憾なからしめんには如何せば可なるや、まづ其修養練磨の法を徐々に説くに先立ち、譬へ如何は修養練磨の功を積みたる人と雖も

心靈の發揮を強ゆる時

怨怖心に襲はれたる時

利慾の念に充々たる時

他思他考の觀想浮む時

如上の四ヶ條の一たりとも、心靈作用の發揮せんとする際抵觸する場合は、斷じて失散に終る可きは明らかなる事實にして、現に千鶴子女史が、明治四十三年九月十四日、麴町中六番町なる大橋新太郎氏の邸にて、諸博士列席環視の前に實驗をなして、失敗に終つたは、寧ろ當然なる事にて、女史の心靈作用練磨が不完全不熟練ばかりでは決して無いのである、其不成功たりし原因は

- 一、自己をして常人と超越したるを一般に公認せしめんとする念慮滿々。
- 二、萬一失散せば、自己の不明覺、又紹介者に對する不面目を恐るゝ念慮心頭を去らす。

三、如上の理由の爲め、無我の境に入る事能はざるにも抱はらず、心靈發揮を強ひたるため
 此三理由ありし決果として、靈妙なる女史の心靈作用を、公示する事が能はざりしなりけしなから女史の
 透覺可能性は、普通人類の有する機能が特に鋭敏になりて、透覺し得るものなりや、或ひは從來科學者が
 未だ認知せざる獨特のものなりや、即ち理外の理なりやは此一回の實驗によりて、眞に其何れかに斷定す
 るは不可能なる事勿論なりと雖も余の思想の傾向は寧ろ人類の通有性に外ならずと信す。
 殊に我國のみならず、外國に於ても之れに類似するもの數多ありて、現に我邦心象學會員中には、顔に
 品物を載せ眼を閉して、其何物なるやと形を知り判別する人有る事は、余も目撃せり、又外國に於て、千
 鶴子の透覺に最も近きは、彼のクリスタル。ゲージと稱するものにして、硝子、水等の如き光りたる物
 を注視すると、事物が之に映寫すと唱ふる者にして其の實例として我國に於ても亦阿部晴明が花山玄啓寺
 の事變か目目に映じ高島陰陽學士が予言の屢々適中せる如き其他神學者が之れに類する透覺故擧に違ひ
 らず。

四 神通力天眼通は即ち心靈の發揮

神通力とか、天眼通とか言へば何となく、少年お伽噺の書中に、用ゆべき文字の如く感せられ淺學輕識の
 措大が一笑に付し去るの、名稱である、乍去、名稱と文字が其技に該當して居るや、否やは、別問題とし

て、古來、我國は固より、支那印度、歐米各國に於て、頗る不可思議なる殆ど人類以外の、靈妙なる意識
 行動を、現實に公示したる者、枚舉に遑あらず、弘法大師の眞言密教中の、不思議の事實を始め、日蓮の
 如き一種不可解の事蹟を現はして、人を歸伏せしめた、イエスキリストの如き最も然り、凡人は皆な以て
 其理の不可解のため、神の技と信じ爾か名稱を下すに至つたのも、強ち笑ふにも當らぬのである、併し其
 實今日の千里眼の如く、卓絶したる著しき心靈の發揮に外ならないのである

其例證として、一二を擧げんかな、弘法日蓮キリストの如きは、概ね人の知る處であるから、省略して
 瑞西國にて十八世紀時代、活神として、偉大の尊敬を、國王及び國民全体より受けた、スヴェーデン
 ルヒと呼ぶ神秘哲學者の、奇蹟を參考に供する事にしやう、ホルヒは西曆一千六百八十八年、瑞西國に生
 れ、一千七百七十二年に八十四歳の高齡を以て此世を逝いた異人である。

此異人に就ては、種々の不思議なる、傳説あるが、最も確實と認め可き、奇談を、左に抄録せん。
 一千七百五十六年九月、スヴェーデン、ホルヒは、英國よりコッテンブルヒに、到着せりスヴェーデン
 ルヒの、住家はストツグホルムに在るので、即ちコッテンブルヒとは殆ど三百哩余、離れて居る。
 スヴェーデンホルヒが、コッテンブルヒに、到着したるは、土曜日の午後なりき、其夕刻土地の名家カス
 テル家より、招待を受けた、此時、スヴェーデンホルヒと會食する爲めに、カステル家に、招待された
 もの十五人あつた。

スヴェーデンボルヒは、一世を驚倒せしむる、神學者として、又哲學者として、當代の大家であることを以て無論招待されて、其席に列せる十五人の客も、亦各々、相當の地位勢力、學識完備の、人々たりしは疑ひなき所である。

夕刻の六時頃なりき、スヴェーデンボルヒは突然奇異なる容子をなして、何事か不安に、堪えざる有様に、街道へ出で行き、復た間もなく、歸り來りしが、列席の人々、之を見て甚だ不審に、思ひつゝ、其故を尋ねた。

スヴェーデンボルヒは、突然言へり。

「今、ストックホルムに大火あり」

と詳細に自己が、現に目撃せるが如くに、其状況を述べた。

「余が友人の家も既に一軒焼失せり、而して今や余の家も亦た、危険なるに至れり」

と語り終つて、其色甚だ隠かならずである、列席の人々は、甚だ不思議に思つたよりは、寧ろ一笑に付し去つて、意に止めぬ人が、多数であつた

然るに其夜八時頃に至り、スヴェーデンボルヒは、ストックホルム出火に就て、再び言をなして曰く。

「只今漸く鎮火をした、予が家より、僅かに三軒目の所まで焼け込み、其處に消し止めた」

スヴェーデンボルヒの言々、殆ど現場に目睹する如く、余りに眞面目である爲め此夜カスデル家に集りし

人の中には、少なからず奇異の觀念を懷いた者もあつた、故に、其人々の説すると共に、此不思議の言は忽ちゴッテンブルヒ全市の、注意を惹くに至つた。

當時交通機關の、不完備なる、十八世紀時代ゴッテンブルヒは、三百哩の遠隔地たるストックホルムに出來事を知るには、迅くとも、二日余を経過せざれば、知る事を得ないのである。

其翌朝に至つて、ゴッテンブルヒ市の知事は前夜カスデル家にありし、スヴェーデンボルヒの奇異なる物語を、傳聞して、直に、特使を、同人方へ遣はして具さに、其事を問はしむ、スヴェーデンボルヒは、知事との質問に對ふるに、火災の状況一々精密に、報告をしたり。

月曜日、即ち三日目の朝に至つて、ストックホルムより、始めて飛脚到着した。

然るに不思議なる哉、スヴェーデンボルヒの語りたるに、寸毫も違はず、果して、土曜日の夕刻ストックホルムに、火災生りたる旨を、具さに此飛脚は、知事に報告をした。

其報告、スヴェーデンボルヒの、語る處と一點の相違をも、見出し能はなかつた。

此事實は十八世紀の中頃より、歐羅巴に傳はる確實動かす可からざる、奇談にして、之れには、最も信憑すべき、記録も現存し、近年歐洲諸學者間に、研究されつゝある問題である。

前述する如く、實に天眼通或は神通力の名稱を付す可きも、異常の心靈を發揮せしむるに足る練磨を積んだ一種の人類と斷言して少も憚らない。

千里眼透覺術の修養

千里眼透覺を行はんと欲するものは、修養の眼目としては

- 一、意志の修養
- 二、感情上の修養
- 三、身体上の修養

此三ヶ條の修養が欠ける場合は到底完全なる透覺は行ひ難く、假し強ひて行ふも其幻覺、正確なる幻覺に
あらずして妄想誤認に陥るを以て成功すべき筈なきなり。

一 意志の修養

透覺物其者に満身の熱血を集中したる視力を浴せ、凡ての注意を凝集し一切の事物に對し、全然無念無
想となり決して外物の爲め如何なる事ありとも動き又動されざる機強固の意志を持つ事。

二 感情上の修養

感情の激動 分り易く言へば、恐いとか嬉しいとか耻しいとか、其他凡て精神の靜平を欠く可き事は、透

覺に大なる妨げとなり、或は全然成し能はざるに至るのである、併し感情の發生は、其時の境遇に應ずる
必然發生するは人類の通有性であるから、強ひて發生する凡ての感情を抑制するは、至難に屬するも、一
定の場合、即ち透覺を行ふ際のみは、境遇の如何を念頭より悉皆去らしめざる可からず、之れ感情修養の
主眼である。

三 身體上の修養

千里眼透覺を行はんとする者は、まづ精神の靜平を少しにても欠くる時は、萬の素養ありとも、成功せ
ざるは論を俟たざる所にして、精神の精平を保つには、健康體ならざる可からず、身體の熱れの部分なり
とも患部あらんか、其痛痒若くは不快を感ずる爲めに、精神の精平は、自然破らるゝなり、然れば、身體
の健康を保つは修養の一である。

以上述ぶる處ろは千里眼の通則を示すものにして本館は曩に高島骨相研究會と稱し此の術と陰陽學と骨相
學により人事百般の複雑なる處世の禍福を指摘豫言しつつあり世に天與の幸福を全ふせむとする士は來れ
次に述ぶる前知法は俗人に否重樂にも解せらるる梗概を通俗的に示せしものにして之れによりて前知せら
るると否とは讀者の心算發揮と經驗の効を積むにあり。

吉凶前知法

某真人遺稿

●誰しも危難災害は未然に知つて免れたからう

人ごしては、疼い目を爲たり、熱い目を爲たり、苦しい目を爲たり、恐ろしくて氣絶してそれで後で苦み通したり、甚いのは貴重命を失ふのは、言ふまでも無く、厭でく慄とするほど嫌ひで有らう、病難云ふて、病氣を患つて、ウン／＼呻つて苦んだり、死んではならないと思つて、それを苦に病んで心を悩ますことは、病氣なつて病み付いてからでも、手おくれを爲ない様に名醫に掛つて、又、一に介抱二に薬といふ動かない定期通りに、病氣看護が極く手に入つた、神女の様な有難い看護婦に看病を爲て貰ひ、時間ご服用を誤らず、身体の養生精神の養生を行届かしたならば、所謂病難は、費用の費へる損害は到底免るゝを得ずごしても、全快して命には恙なからうけれども、病難外の劍難、ナツト刃物で斬られる難ばかりぢや無い、ピストル、小銃、大砲、爆烈彈等の火器類、或は石棒なごて打られる危難、盗難、詐欺取財に罹る難、火に焼かれる危難、水に溺れて死に、又は財物を水中に落して損害を受ける難、地震の難、これは氣象臺や測候所から豫報をするが、新聞なごを見ない者は知るまいし、又、落雷の難、これは避雷柱を建てる資力の有る

二

者は好からうが、然も無い者は前方に、落ちる處を知ることは出来まい、又、負傷の難、これは思はぬ上方から物が落ち、其の身が高い處から落ち過つて車輛に轢かれ、種々の負傷、又命を失ふ難、或は心付かずに毒物を食し或は毒殺しられる狂難、それはく澤山危難があらう、是等の危難は絶体的未然に知られるわけでは無いと思ふであらう、ごころが其れを前に知る秘法が書いた神傳が手に入つた、又病難は、健康診断を受ければ前知は出来ようけれども、月初に受けた診断で、月末の急病は知れまい、さすれば是れも、前知しなけれりや功は有るまい、それを前知するの法もあるのである

文明の今日は、不良の罪人さへ生命を貴重にする位である、況てや善良の人々が、前知するを得べきごを前知せずして、不意に危難に遭ひ、苦み又は命を失ふのは、文明も開明も言い得まい、斯る前知法を知りながら、公けに衆人に知らさないのは、開明時世の不親切者、それで以て知らすのである、危難災害は、いつ何時生じるかも知れない、福災は飯の煮える間に生るご言ふでは無いか、御注意く、前知法は知つて、又其の前知を茫然として、知り落さない様にしなければなるまい

以上の如く述べるご云ふご、それが知れる位なら、遭難ご云ふごは一切無からう、辭書から此の熟語は放逐が出来るご言ふだらう、いかにも放逐が出来る、凡夫たる人間は如何考へても前知法を看出せない、豫言者ごいふ者があつて、未然の出来事を豫言して、それ

が當ること、又當らない事もある、信じて當らなかつたら、反つて害だから信じないが勝だらう、我國では古昔、聖徳太子殿下の未來記といふものがあつて、四天王寺にあつたのを、楠公が奉讀して、能く當つてあつたといふことだ、是れも神傳、聖徳太子と稱へ奉る佛の再來も申す御方だから、神傳を御承知あつたに違ひ無しだ、支那でも譚といふことがあり、前兆といふこともあつて、未然の事の知れたことがある、併しこれは國家の大事故、天變地異と云ふ様な大きなことで、一個人が火難、水難、劍難、盜難、嫌疑を受ける迷惑が掛る、人違ひで打たれる、意外の辱しめに遇ふなど、云ふことは、如何も知れないそれを前知する法を公けにするのは破天荒、開闢以來眞以て創めてのことである

●危難を未然に知らずは神明の本意

神様が人々個々の危難をば、未然に知らしてやりたいこの御意は、必ず有ると云ふことは神様が萬物の靈長たる人類を鍾愛し給ふ理合から推して知れる、神様は我々人類を造り給ふて、自由自在に働き得るの機能を與へ給ふ、これは解剖學、人身生理學などで、組織の巧妙なるところを知れば、愛し造つて下さつたことが解る、父母はこれを擧げながら、人間だから知らないが、大父大母と崇め奉る神様は、製造主だから知つて居らるゝ、此の結構なる身体を與へて置いて、其の上に草木には種々無量の美しくい花を咲かせ、又其の花を見せて樂しませての後は、數限り無い美味い菓物を實のらせ、旨い舌打させて

人の口を悦ばせ、物は言はせ給はねども、慈母が赤子を愛する様に、愛し給ふの證據である、併し寒暑冷熱は、無くては此の世が維持が出来ないから、身を焼く様な夏の土用、指を墜し膚を凍らす冬の寒中、これもある、これは憎んで成さるので無い、暑寒が無くては命を繋ぐ食物の、植物類が育ち花咲き實のるここが出来ないから仕方が無い、依て暑寒を防ぐには、それ々の材料を與へ、暑い時には外に出て涼み、水を與へて浴みさせ、寒い近たい其の時には、暖まるを得る火を取らせ、冬籠の家屋の材料、夜着蒲團衣類重ね着の材料まで、皆んな與へられ、春は陽氣に暑からず寒からず、肌持よくして花見をさせ、秋は澄みたる空の月、樂むさきには樂ませる、これまでも事こまかく注意して、樂ませるからには、其の人々個々の危難を前知させることも、具はつて無くては理が詰まない、それだから此の危難を未然に知つて免れる仕方をば、昔々の其の昔から、知らせてあつたを見出さずに、今日まで暮らして來たといふは、神の賜を受けなかつた、いかにも不幸の間である、これで以て神傳の前知法はあるものご知るがよい

●神明は必ず有るべきもの

神明は即ち造物主で、人類を首として萬物を主宰し給ひ、人類を殊に子として愛み給ふ、難儀する者を救助しらるゝ方から言ふと、救世主と言はなきやならない、さて神明は、形を表はしたのもあるが、全体御面も御体も無いもの、世の中の道理の本意と申して可か

らう、此の神明を、世界的では造物主と申し、洋語では「ゴット」と云ふ、我日本では造化三神、其の中心なる天之御中主大神を造物主として、開くことを掌り給ふ神を、高御産靈神、闔ることを掌り給ふ神を神御産靈神と申す、此の下々に八百萬の神々が在して、人類はじめ萬物の世話をやかせらる、斯うも數は多いけれども、我々人類が大父大母と頼み奉るは天之御中主大神一柱に歸する、其の大神が危難前知法を授け給ふたのである

●眼を塞ぎ、上眼ぶたを指先で突いて危難を前知する法



誰でも眼を塞いで上眼ぶたを指の端で、上の圖に記した黒圈のそこを突くと、金色の輪の様なもの、ピカ／＼と現はれる、行つて見るべし、屹／＼現はれる、平日は左様だ、處が若し此の金色の輪が現はれなくて、見えないときには病難か何かの災害があらうし、又生命にかゝる事が有らう、萬一見えなかつたら、充分注意すべし、此の知らせは三十日前か又は一週間前から知らせがある、若し免れたれば、又々平日の如く再び現はれる

鏡



●鏡に對ひ、我が眼の黒球の中を見て危難を前知する法

上の圖の様に鏡に對つて自分の眼を見るに、眼の黒球の中に、自分の姿が少し映つて見ゆるものである、平主いつも斯様であるが、若し災害が來らんとするときは、一週間か又は三四日前から、自分の姿が黒球の中に映らない、斯様だ、大變だから、此の時には充分注意して、免れるやうに心掛るべし、姿が元の通り、平日の様に映るまでは心配だが姿が再び平日の様に映れば、既に免れた證據だから安心だ

圖

●脈すぢを抑して見て危難を前知する法

次のページに掲げた圖の様に、咽喉首の左右に在る脈筋を抑へて見るのに、何方も各々一ツ調子に脈が打てば常の脈である、處が若し災害に遭はうとするときは、二十四時間前から、此の脈が亂調子に狂ひ出す、斯様なときは他行をしては災害に遭ふ、若し敷居一寸でも跨げて他行せんとする思ひが有れば、必ず止めにして宅

て注意すべし、又他行する思はくが無くて、何の思ひも無くて出かけるこ、自宅の内て災



是ヲ三脈ト云フ也

害が有るこ知るが可い、さて是れが自分一人ばかりが出るのだこ、自分一身の災害を知るがよし、若し家族の者にも出かける者が有るこ、一家の災害こ心得て、萬々注意を怠るな、或る地に氣車の轉覆して重輕傷者を多分出し、死者もあつたこ、此の前知法で脈を見て、左右で三脈の狂ひが有つたので、早速こ下車した、其の時人助けと思つて、此の行り方を數人に教へたそれを聞くこ、脈を取つて見て下車した者、又畏がつて下車した者、皆々助かつたこれが確證

七

●眼中及び口邊の現象で危難を前知する法



此所ニ赤筋ヲ引ク

此知ニ赤青黒ノ色ヲ現ス

るこ必ず重い、これでも追々色線が淡くなるこ免れる知らせである、此の危難のある知ら

これは上の圖の様に、眼中の白球の左右に赤い線が貫き通るので危難を知らせるのである、依て自分が毎日手鏡でも見るが可し、又、家人に誰にでも毎日見て貰ふも可い、見て貰ふた上にも、自分が鏡で見れば大丈夫慎み、注意の深いのだらう、此の現象が現はれるこ大變だ、必ず劍難か又は狂死をする知らせである、尤も両眼で無くて一眼なれば少し軽い方だが、両眼共に貫けば、其の災害は中々重い又一眼でも、黒球の上を貫き通

八

せは、三十日前に現はれるのもあり、或は一週間前後から知らせが有ることもある、又今一つ、右の圖の様に、口の邊りに淡青黒色の現はれたるときは、水難か或は狂死の知らせと心得るが可い、是れは三十日前後から現はれることもある、又は一週間前から現はれることもある、これも其の色が追々淡らぐと免れる、これが免れる知らせである

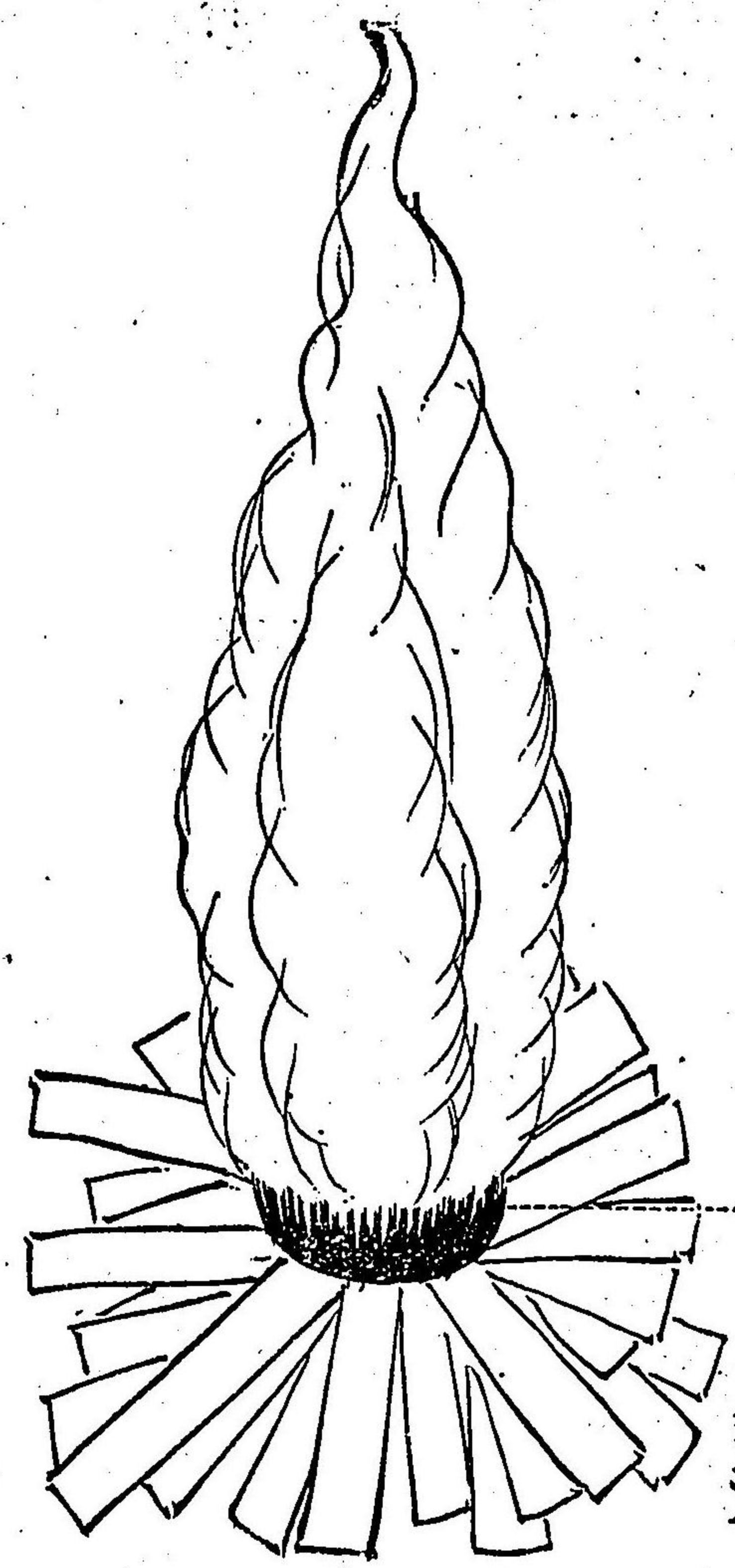
●火の燃る根本の現象で危難を前知する法



水気有ノ証也

その知らせだから戒心しなければならぬ、此の時には自宅の用心は勿論、近傍の人々にも注意を與へ、夜も寝ずに注意して、油断をせず免れるべし、火の燃える根元に水分を含めば、黒青色の見えるのは、物理上然うあるべき筈なのに、それが見えないのは、災害を受ける人の眼に申し分を拵へて、神明が前以て知らして下さるわけだ、疑つては宜くない、信すべし

上の圖の様に、蠟燭の火でもランプの火でも、油火焚火でも、總て燃る火の根元に黒青色の有るのは水分を含む證據である、若し此の黒青色が見えないときは、大變だ、屹し火難がある、



水気含シテ証也

十
上の圖は焚火である、能く斜めに透かして燃ゆる根元を見るのである、蠟燭やランプの火では小さいから、然うでは無いかと迷ひも起らうが、此の焚火は火が大きいから、見えるか見えないかは、判然わからう、まことに見やすい事だ、午の年などは別して火早いから心得置くべきことだ、

●神明を信すべし

以上の危難を前知する法は、述べた通り神明が人類を保護する爲めの御知らせだから、有難いと思つて信心ふかい心から見きはめなくてはならない、假りにも疑つては何にもならぬ

ない、さて危難前知の知らせだと思つたらば、自ら用心するは勿論、一心に神明に祈念して、免れまする様に祈るべしだ、さうするに、神人感應と言ふて、神明と人間との精神が一致する、固より助けてやりたいこの神明の御心だから、感應すれば助かる理屈である

●蟲が知らす云ふ事

虫が知らす云ふことは、能く人の言ふことである、これは何か氣に障ることか、氣分が悪いかで、心に咎めることを言ふ、前に述べた様に、眼ぶたを突いた眼の現象や、鏡に映つた黒球の現象、脈で知り、眼中の線引き、口邊の色、燃火の根元の色、是等の有無、見える見ぬない云ふ様に、判然とはしないけれども、矢張り神明の告げ知らせの事も有らう、依て、迷信だの御幣かつぎなど言ふて、馬鹿にする様な心を持たずに、氣に咎めるときは身の用心をすべきことである、さう云ふときには、只だ何かなしに虫が知らすばかり思ふて、思ひ捨てにせず、然ういふときに、前知法のいろくを試しに見るが可いのである、これに就て一話がある

或る人は、いつもダラ入を持つて出ないことは無いのに、或る時邊て、出たものか、持つて出なかつた、其れを心付かずに、目的の家へ必用があつて行く途の、いつも行く散髪床へ立よつて、さて散髪を刈り、髭を剃り、了つて散髪料を拂はうとするに、豈圖らんや、ダラ入が無い、人ごみの處を通らないから、拐兒に取られたでも無いと、思案數

回、どうも無い、それで無間だが、散髪床の親分に、どうも濟まない、貸して下さい持たせてよとす、そこくにして去つて、氣に咎めるから、目的の家へ行つては難に遭うだらうと畏氣が生じて、其の日は自宅へ引返して慎んだ、ところが果して先きへ行つたら難に遇うのであつた、是等は神人感應である
又、履物の鼻緒が、自宅を出るとき、ブツツリと斷れた、それを氣に咎めて他行を止めることもある、或は鶏の宵鳴、鼯の道切、何やかや氣に咎めることは多い、然ういふことには注意して、右の前知法を試むべし、必ず効がある。

明治四十三年十二月廿七日印刷
明治四十三年十二月三十日發行

大阪府南區生玉町一〇三番地

著 者 三 宅 隆 海

大阪府南區大寶寺町東ノ丁二三九

印刷者印刷所 上 野 惣 太 郎

大阪府南區松屋町三十九番地

發 行 者 榎 本 松 之 助

大阪府南區生玉町百三番地(但生玉表門交番所隣)

發 行 所 日 本 心 理 學 會



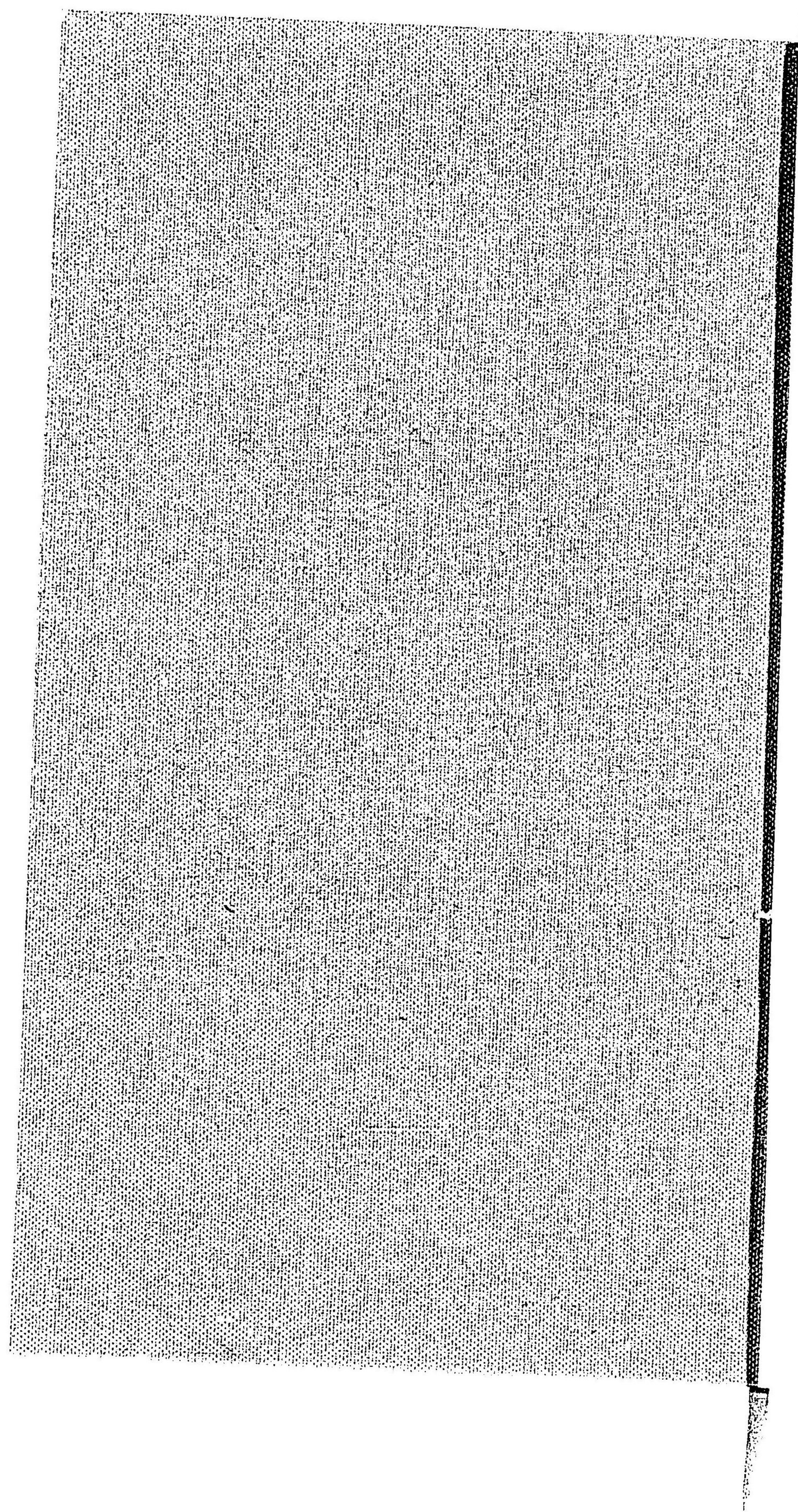
2477

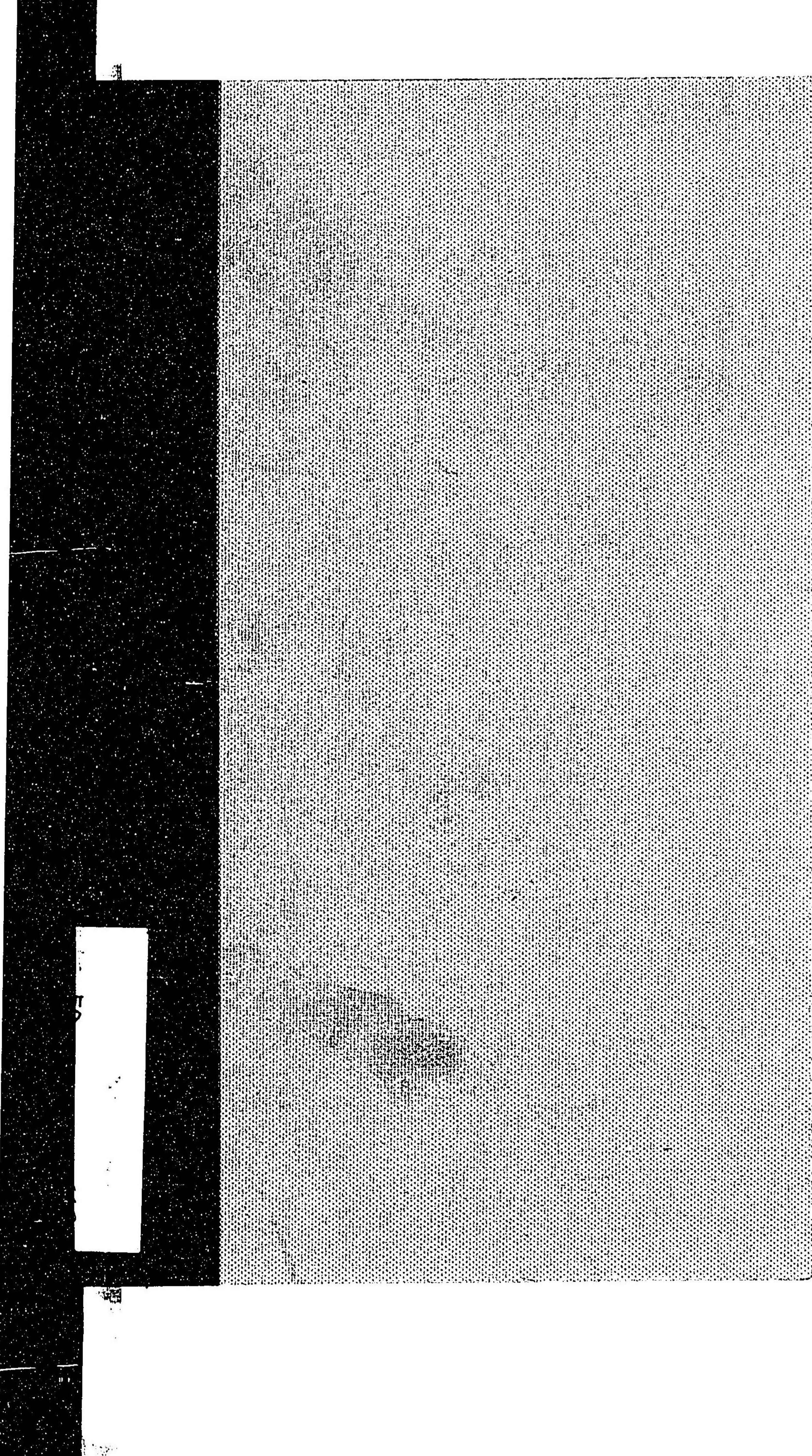
內務省

司

不
得
許
製

定價
一册
金貳拾錢





特 50
116

透視容易千里眼

国立国会図書館

012789-000-2

特 50-116

透視容易千里眼

三宅 隆海/著

M43

AAJ-0032

